
機械仕掛けのマリア

久木 秋啓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機械仕掛けのマリア

【NNコード】

N4223M

【作者名】

久木 秋啓

【あらすじ】

平凡な高校生活をおくっていた紺月遼は、ある事件をきっかけに謎の美少女、蓮実麻里亜と知り合い、「存在してはいけない者達＝イラシヨナル」との戦いに巻き込まれていく。

サイコホラー・チック・サイバーSF学園もの風ブラックバトルラヴコメディ！

第零話「優美な死骸と踊れ」 -0-

半ばひからびた老人の死骸が、コンクリートの上に横たわっていた。長く伸びた白髪はほとんど抜け落ち、眼球は鳥にでもついばまれたのか黒い孔だけが開いている。

俺は死体のかたわらにひざまづき、そのしなびた手を握りしめた。

「マリア、こんな姿に……」

手の甲に額をぎゅっと押しつける。

バキッ。

思わず涙がこぼれた。悲しみのためではない。突然、後頭部を襲つた痛みにだ。続いて声が降つてくる。

「バカ。そんな汚い死体のどこが私なんだ」

「いつてー……」

俺は後頭部を押さえて振り返る。

強い風が吹き抜けていく学校の屋上。冷たく輝く満月を背にマリアが俺を睨みつけていた。

俺はふてぶてしく苦情を言つ。

「汚いはないだろ。不謹慎だぞ」

「それはお前だ。見知らぬ死体と漫才するな」

と、マリアはすこじで見せるが、小柄なうえ幼い顔をしているから全く凄みがない。思わず笑みをこぼすと、今度は眉間に一撃食らつた。

「にやにやするなー！」

「べツ」

彼女の名は蓮実麻里亞はすみまりあ。この“仕事”を引き受けている間、俺の相棒ということになつてている。

俺は嘆息しつつ、襟を正した。

「分かったよ。とりあえず調べてみるか」

俺は再び、死体のそばにうずくまつた。

なぜ俺たちが真夜中の学校で、死体の検分などを行つてゐるかといふと……。

これは一種の“業”なのかも知れない。

まあ、俺たちにもよく分からぬ。

俺やマリアの通つてゐる某普通科高校は何の変哲もない、本当に平凡な学校だつた（まあ、ド田舎にあるということをのぞけばだが）。みんな適当に勉強したり、遊んだり、部活にいそしんだりと、まあ、それなりに楽しく過ごしていた。

ところがだ。妙な事件の発生と共に、俺たちの日常は異常なものになつてしまつた。

すなわち「老人死体発生事件」だ。

つまり何の縁もゆかりも無い老人の死体が、突然、学校内に出現したわけだ。

早朝に登校してきた一年生リ子さんは、自分の席に座つて死んでいる老人を発見してしまつた。パニックに陥つた彼女が職員室に飛び込んだ瞬間から、ありふれた日常は音を立てて崩壊していつた。警察は来る、TVは来る、新聞記者は来る。もちろん臨時休校になり、学校はしばらく立ち入り禁止になつた。あんまりにも突拍子の無い事件だつたせいか、不気味なものを感じながらも、状況を楽しんでいるヤツもいたようだ（リ子さんはそれどころじゃなかつたがようだが）。

警察の調べによると、机に着いていた遺体は数日前に亡くなつたXX氏（享年63）で、学校の北にある寺に土葬されていたものらしい。事件はその日の夕方のニュースで報道され、日本と世界の人々は煙に巻かれたまま、ひとまず一日を終えた。

しかし、そんな事件が一週間も続けて起こるとは誰一人予測していなかつたに違ひない。

事務に訪れた教師や警備に当たつてゐた警察官が、きつちり一日に一体ずつ、謎の死体と遭遇した。

出現方法もだんだん手が込んできて、掃除道具を入れたロッカーを開けたら倒れ込んできたり、保健室でベッドに寝てしたり、理科室で人体模型や骨格標本と親しげに肩を組んでいたり……（していたという噂だが）。

警察では「学校関係者に対する怨恨によるもの」あるいは「悪質にもほどがあるイタズラ」等と見て捜査を進めているが、遺体が全て付近の高遠寺に埋葬されていたものだと言つこと以外は全く見当がついていないらしい。

事件は連日トップニュースで報道され、世論に後押しされる形で警備の人員も増強されたが、“死体の発生”を食い止める形できないでいる。

ということで、今、俺たちの目の前に横たわっているのが、まさにその“死体”。それも今夜出現したばかりの最新型ということになる。

「しかし、今どき土葬なんかしてるから、いけないんじゃないのか？」

とりあえず黙祷を捧げた後、死体の帷子や皮膚を各種計器を用いて入念にチェックしながら、俺はマリアに声をかけた。

「それは法律上問題無いし、むしろ“被害者”側の宗教観に関する問題だ。事件の本筋とはあまり関係ない。……この事件、単なる悪ふざけとは思えないだろう？」

「ん~、そうだな」

俺はうなずいた。警備が厳しくなった学校に侵入するのは難しい。おまけに重い死体を担いでいるならなおさらだ。

つつても、俺らは堂々と侵入してきているわけだが。

「もしも何の苦もなく警備をかいぐぐることができるとすればマリアがふと咳くように言つた。

「犯人は私たちと同じ“イラショナル”かも知れないな」と。

「こちおう、終わったぜ。計測結果が出た」

「待て……！」

俺が計器をしまい、立ち上がるうとしたとき、マリアは鋭い声で制止した。

顔を上げ、視線は虚空を凝視している。

「へ？」

「何か居た。少しそこで待つてろ」

そう言い残したのとほぼ同時に、マリアの姿はかき消すように見えなくなつた。

やれやれ。

俺はぺたんと尻餅をつく。そのまま足を放り出して座つた。
何か居るとした場合、いつたいどうしたらいのやら。俺はマリアのように自衛手段を持つてはいない。運動は苦手つてほどでもないが、格闘技ができるわけでもない。変なものが襲つてこないのを祈るしかない。

「どうしたらいいんですかねえ」

俺は横たわる死体に声を掛けてみた。

その時、遠くのほうから小さく悲鳴のような声が聞こえてきた。

「な、なんかヤバイな」

少し背筋が寒くなる。

よく考えると（いや、考えなくてもだが、思考が麻痺していたのだろう）、死体と一緒に夜の学校の屋上に放置されている、というのも不気味なシチュエーションである。なんとも心細くなつてきた。

学校の周りは四方を山に囲まれている。いくつかの細い坂道が畠の間をぬつよにして近隣の町まで繋がつているのだが、いまは暗くて何も見えない。耳を澄ますと、静まりかえつた中に何かが吠える声も聞こえてくる。

ふと視界の端を何かが過ぎた。

ぞつとしてその方向を見すえるが、闇ばかりだ。一瞬、マリアを

呼ぼづかと思ったが、遠くに届るなら声を出したって仕方がない。近くにいるなら、俺より感覚の鋭い彼女のほうが気がつくだろう。相手に聞かれてもまずい。俺は体を低くして身構えた。

じつと目を凝らしていくうちに、何かが見えてきた気がした。闇の中に影のようものが動いている。

悪寒が全身に走った。見すえているうちに、それが俺を見つめていることに気づいたのだ。眼球が見えたわけじゃない。ただ、何か得体の知れない視力でもって、それが俺をみつめているのが分かった。

それはゆるりと震えると、俺に向かって長い“手”を伸ばしてきた。俺は逃げようとするが、体が凍りついたように動かない。

「おい」

ぽん、と背後から肩を叩かれ、俺は絶叫した。

「おいおい」

ぐるり、と体を反転させられる。マリアだった。ふと安堵を覚えた瞬間に、みぞおちに肘が襲ってきた。

「黙れ、ってやかましい」

「げががぶぐばがばげべげ」

俺は崩れ落ちながら、闇の中、影がうごめいていた場所を指さした。

「どうした？」

「な、何か……いた」

顔を上げてみたが、そこにはもう何もいなかつた。

マリアは軽く舌打ちする。

「私をおびき出して、お前を狙つてたのか……？　してやられたな

「そ、そういうことなのかな？」

「たぶんな。……そろそろ退散しよう。荷物はとられたりしてないか？」

俺はあちこちに覚える痛みに耐えながら荷物を探つたが、とりあえず何もとられたりはしていなかった。

ふと死体に目をやる。その表情はなんだか笑っているよつた気が

した。

つづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4223m/>

機械仕掛けのマリア

2010年10月10日02時12分発行